口の中から
フランソワ・モーリヤックの小説における食欲

福田　耕介

序　口の中

フランソワ・モーリヤックは一般に、「何よりも人間の心の画家である」[1]とされ、多くの行数が割かれることのない彼の作中人物の肉体描写には、心理描写に対するほどの関心は払われて来なかった。そうした中で、モーリヤックが作中人物の身体に言及する時の特徴として早くから指摘されていたのは、肉体的醜さを辛辣に暴き出す筆致である。既に1929年にラモン・フェルナンデスが『神とマンモン』に付した序文の中で、「時折、モーリヤックがある種の刺々しさをもって作中人物を描写する様を見ると、彼には、作中人物たちが醜かったり汚かったり弱々しかったりすることが許せないのではないかと思えることがある」[2]と記している。また、最近では、マリ＝フランソワーズ・カネロが、モーリヤック作品において、肉体の病的な状態がしばしば想起されることを、愛の欠如という彼の小説の本質的なテーマと結び付けて論じていることが目を引く[3]。

この二つの特徴は、恐らくこの作家の小説にいくらか親しんだ読者にはすぐに合点のいくことであろうが、具体的に肉体のどの部位が醜く、病的に描き出されるのか、ある部分が、他の部分にも増して、繰り返し醜い病巣として選ばれるということがあるのかという指摘まではなされていない。そこで、「心の画家」であるが故に看過されていた感のあるこの単純な問いを発してさらにモーリヤックの小説作品の肉体という表層に踏み止まってみると、好んで口の状態が文中に描き出されていることが目にとまる。例えば、テレーズ・デスケルーに関して、繰り返し言及される肉体の部分の一つは、彼女の薄い唇である[4]。

---

[1]Ramon Fernandez,*Préface à Dieu et Mammon*, in François Mauriac : *Dieu et Mammon*, Le Capitole, 1929, p.41

[2]*Ibid.*, p.47

[3]Marie-Françoise Canérot, « Mauriac devant la maladie et la mort », in*Nouveaux Cahiers François Mauriac* no.3, 1995

[4]『テレーズ・デスケルー』では、テレーズは「吸い込まれたような唇」(II,25) を持つとされ、この特徴は彼女の登場するその他の作品中でも保たれている。『失われしもの』では「唇のない口」(II,312)、『医院でのテレーズ』では、「呑み込まれた唇」(III,16)、『夜の終り』では「閉じられたなどという程度ではなく、努力して固く結んでいるかのような唇」(III,128) が想起されている。

なお、モーリヤックの小説からの引用は次の版による。François Mauriac, *Œuvres romanesques et théâtrales complètes*, éditées par Jacques Petit, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.I-IV, 1978-1985.

本文中のそれぞれの引用の最後に上記の版の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で示した。なお、邦題は、浜崎史朗編『モーリヤック略年表・書誌』(『モーリヤック著作集６』、春秋社、1983所収) に従った。

しかし、ここで注目してみたいのは、モーリヤックの観察が、他人の目に常に曝されている訳ではない口の内部にも及び、そこに上で引いた二つの特徴の集結している点である。彼の小説世界では、一瞬の隙をついて、他人の口の中を詮索することが好まれ、しかもその時に言及される歯や歯茎の健康状態は思わしくなく、見た目にも快いものではないことが多いのだ。既に、モーリヤックの最初の小説『鎖につながれた子供』の中で、講演するジャン＝ポールの視線が、講堂の中の一聴衆の「駄目になった歯」(I,29) を鋭くとらえていることからわかるように、この特徴はこの作者の小説に広く、一貫して見てとることができる。『ジェニトリクス』では、マリ・ド・ラドスの娘が、「硬化した歯茎」「黒い口」(I,642) を見せ、『失われしもの』のイレーヌに関しても、「口紅を塗った唇のせいで歯茎と歯根の露出した歯が恐ろしいものに見えた」(II,324) という記述がある。『十八番目はチボー先生』では、まだ若い召使のスゴンドが「歯の抜けた口」「窪んだ唇」(III,28) のために「老人」のように見えるとされる。さらにモーリヤック最後の完結した小説『ありし日の一青年』でも、プリュダンの「歯はみな腐っている」(IV,664) と指摘され、その弟シモンに関しては「歯ブラシを使うことを教えてやらねばなるまい」(IV,693) と書かれている。天使のような顔を持つとされる『癩者への接吻』のノエミ・ダルティアーユに関してさえ、たまたまのぞいただけの「ややくすんだ疑わしい犬歯」(I,460) が見合いの相手であるジャン・ペルエールの視点から「欠陥」として指摘されているのである。

健康状態に問題のない場合でも、歯の状態に何らかの留保の付けられないことはほとんどない。その時、特に問題となるのが、歯並びである。『肉と血』の中では、メイの花婿候補として登場するマルセルの外貌を、メイの兄エドワードが眺め、「健康だが、歯並びの悪い歯」(I,242) の持ち主であることを見逃さない。同様に『黒い天使たち』のアンドレスは「健康だが、並びの悪い歯」(III,270) を彼を愛するマチルドの前で見せ、女性では、『失われしもの』のトータも「純粋だが、並びの悪い歯」(II,368) を彼女に恋するウィリアムの目に曝している。たとい現在健康であっても、虫歯へといたる潜在的可能性の高さを示す歯並びの悪さがモーリヤックの作中人物の目を逃れることはないと言えよう。

数は少ないが、何の問題点も指摘されない歯を見出すことも不可能ではない。『パリサイの女』では、ミシェルが皆から愛され得る要素として、「笑った時に大きな口から全部見える純粋な歯」(III,719) を持ち、『子羊』のドミニックには、「まだ乳歯であるかのような歯を少しのぞかせている魅力的な口」(IV,493) がある。「純粋」「乳歯」という言葉からわかるように、ここで彼女たちの魅力を構成しているのは、モーリヤックの主人公を引き付けて止まない子供のあどけなさであり、「魅力的な口」の要因が未だ腐食に屈していないことにあるのがうかがえる。

肉体描写に大きなスペースを割くことのないモーリヤックが、その限られた描写の中で、このように食物の咀嚼によって作中人物の歯や歯茎が損なわれていないかどうかを読者に示すことにこだわるのはなぜなのだろうか。この疑問点を出発点として、先ず、口の中の健康と密接に結びついていると思われる食欲が、この作家の小説世界でどのように描き出されているかを見てみることにしたい。

食欲と動物性

モーリヤックの小説で、誰かがものを咀嚼する様子を眺めることは、大抵見る者の嫌悪を誘う。食事の様子は、「がつがつと」(voracement)、「獣のように」(comme une bête) などどいう否定的な言葉で形容されることが多い。『愛の砂漠』では、レモンに関して、「彼はがつがつと食べ、小さい女の子たち自身も、彼に言葉をかけることはできなかった」(I,841) という記述や、「獣のように食べ物にとびかかる」(I,755) という記述が見られる。『夜の終り』ではテレーズの前で、マリが「寄宿生のがつがつとした食欲で」(III,88) 食べるという醜態を曝す。「犬のように」食事を取る作中人物も珍しくはない。『悪』では、「若い男は突如食べ物に飛び掛かり、犬のように素早くがつがつと皿を綺麗にした」(I,670) のであり、また『海への道』では「ドゥニが犬のようにがつがつとスープを飲み込んだ」(III,671) とされている。

ここからうかがえるのは、モーリヤックの世界において、人目を憚らずに食欲を満たすことが動物を連想させ、人間を動物に変えるということである。以上の例では、何よりも作中人物の食事の取り方が動物を連想させているのだが、この結びつきは実はそうした外面的なレヴェルに留まってはいない。先ず指摘できるのは、しばしば食欲は精神活動を妨げると考えられていることである。食事の場に関して見ると、咀嚼は会話を中断させることが多い。既に上に引いた例の中で、レモンのがつがつと食べる様子は、周囲に声をかけることをためらわせ、一種の会話の拒否となっている。また、『ジェニトリクス』の中ではマチルドが食卓で夫と義母に対し、次のように冷やかな視線を向けている。

> 彼らが二つの言葉の間で長いあいだ口をもぐもぐさせてゆっくりと話す時に、どんなに彼女は彼らを軽蔑したことか。「この人たちは、食べ物を飲み込んでからやっと話にもどるのだ。話の内容を食べているものより優先することなど絶対にしないタイプだ。」(I,593)

同様の場面が、『鎖につながれた子供』の中にも見出せる。そこでは、食べることに気を取られた父親の姿が、ジャン＝ポールから届いた手紙を読んでくれるのを待っているマル

トを苛立たせる。

> マルトが胸をどきどきさせて目を閉じていると、彼は急ぐことなく、フォークの先にフィレ肉の塊と、脂肪を少しとジャガイモの小片を集めることに打ち込み、それをしばらく肉汁に浸していた …「お父さん、早く読んでよ」とマルトはかっとして叫んだ (I,44)。

ここでも咀嚼が発話よりも重んじられているのであり、ジャン＝ポールに恋するマルトには当然のことながらそれが耐え難く写るのである。

食物と言葉との両立の困難は、単に食べながら話すのが難しいという肉体的次元に止まらない。モーリヤックの作中人物にとって、食事に専念することは理性による精神活動を中断させるものとして捉えられることが多く、理性的思考から逃れるために食欲の中に埋没しようと欲する者も珍しくないのである。例えば、『失われしもの』のブレノージュ夫人は、嫁の葬儀の後で、嫁の死に対する自分の責任について苦悩している時に、突如、激しい食欲を感じる。

> 食器台の上の器にバナナと蜜柑がいくつかのっていた。彼女はそれを食べたりしないように自制しなければならなかった。それほど彼女はお腹が空いていた。長い間、これほど食べ物が欲しくなったことはなかった (II,343)。

間の悪い抑えがたい食欲は、彼女の深刻な宗教的苦悩を読者の目にいくらか滑稽なものに変えてしまう。しかし、ブレノージュ夫人のこの突然の食欲の背後にあるのは、この引用部の直前に、「考えないようにすること、それだけが取りあえず彼女が自分に出来ると感じられたことだった」(II,343) と記されていることから明らかなように、考えまいとする彼女自身の意志なのである。この場面では、食欲に身を任せることは、自省から生じる苦悩を逃れる手段と見做し得るのであり、その点でここでの食欲は、人間の身体の持つまた別の欲望である睡眠欲がモーリヤックの世界で果たしている役割を肩代わりしていると言えるのだ[5]。

『子羊』においても、異端的な考えを持つ司祭が子供たちに公教要理を教えていることに愕然としたグザヴィエは、「ほとんど獣のようにグリュイエールチーズとパンの上に飛びかかる」(IV,550)。そこに一瞬とはいえ、「動物的幸福」(IV,550) によって宗教上の苦悩から逃れようと欲する彼の意志を見てとることが可能である。さらに同じ小説の結末では、

[5]苦悩から逃れるためにモーリヤックの主人公が眠ることを欲する例は多い。いくつかの例を上げておくと、もう子供ではないことを自覚し、大人としての生き方を探ることを迫られた『青年の白衣』の「私」が「眠ること、永遠に眠ることしか願っていなかった」(I,187) と記す。『悪』ではコロンブを失ったと感じたファビアンが「眠り、永遠の死ではないような一つの死」(I,698) を求め、『ありし日の一青年』ではジャネットの強姦され殺害されたことを知ったアランが「横たわって、目覚めのない眠りにつくのを待つこと」(IV,801) を思い描いている。

愛するグザヴィエの死を目の当たりにするという衝撃も、ジャン・ド・ミルベルが食欲に身を任せることの妨げとはなっていない。「彼はがつがつと食べた」(IV,567) のであり、その後には二年間も夜には訪れたことのない妻の寝室へ共に上がることに同意するのだ。

時宜を得ない食欲が作中人物を捕らえるのは、何も本人がそれを望んでいる時に限る訳ではない。食欲が間の悪い時に作中人物の中に湧き起こり、理性の抑止を振り切って欲望の充足へとその人物を駆り立てることも起こり得る。『蝮のからみあい』では、フィリが、イザの死んだ後に食事の遅れていることに不満を洩らす姿が、妻を失った悲しみとその最期に立ち会えなかった憤りに我を忘れたかに見えるルイの目をとらえている (II,502)。『フロントナック家の神秘』においても、母が重体であるとの報せを受け取ったブランシュ・フロントナックは自分の子供たちがいつも通りの食欲を示すことに満足ではない。

> 子供たちの食欲はブランシュを憤慨させた。自分が死ぬときも、料理を回しあったりするんだろう (II,584)。

『ありし日の一青年』では、婚約者マリとの破局が決定的になった時も、アランは「意地汚く」(IV,785) 食事を取る。彼の母親も、息子がパリへと出発する前日に、自分がいつもと同じように食欲を感じることに気がついて、「食事をすることに満足で、お腹が空くとはね」(IV,813) と驚かずにはいられない。未完に終わった最後の作品『マルタヴェルヌ』の中で、アランはその母の葬儀の際の食事に言及する。そこでは、参列者は悲嘆に暮れた当事者が席を外すのを待って、存分に食欲に身を任せるのである。

> 私はテーブルを一周し、握手をし、それから自分の部屋へ下がった。しかし既に食堂では声が高くなっていた。彼らは緊張を解いた。粗野な笑い声さえ聞こえたが、それはすぐに止んだ (IV,846)。

『パリサイの女』においても、語り手が父親の葬儀の際の食事について次のように書いている。

> 近親者が誰もいなかったので、我々の後見人である公証人のマルベックが食事を取り仕切った。コーヒーの後で、彼は我々の所へ上がってきたが赤くなってほとんど陽気なくらいだった (III,826)。

食欲は、モーリヤックの小説世界では、時に理性によっても制しきれない力で人を支配し、人間の内に潜む「粗野な」動物性を明るみに出す力を持つと言えるだろう。

食欲と性欲

さらに、食欲はしばしば、モーリヤックによってほとんど肯定されることのない性欲に結び付けられる[6]。『火の河』のダニエルやレモンにとって、「愛のために作られた」(I,533) 女性は「食用に敵する」(I,534) とされる。また、『悪』のファニーにとってのファビアンとの出会いは、次のように描かれる。「飢えて死にそうな瞬間に突然この大きな熱いパンが彼女の手の届くところに現れた。渇いて死にそうな瞬間にこの唇が。」(I,675) ファニーにとって大事なのは、明らかにファビアンの体であり、それが「パン」に譬えられている。実際、二人は彼女の先導によってすぐに肉体関係を結ぶことになるのだ。

また、食欲の充足は、作中人物に性欲の充足を願わせる。『ジェニトリクス』では、「食休みの時間に」(I,634) フェルナンは「彼の習慣」(I,634) について考える。「彼の習慣」というのは、ボルドーに囲っている愛人のもとに通うことであり、食欲を満たしたことの催淫効果は明らかである。『地位』においても、貧窮ゆえに慢性的な空腹に苦しんでいたオーギュストが、いとこの好意からカフェで久し振りに食事を取ると、真先に「高いスツールに収まりきらない女の子の尻」(III,382) に目をやり、「あれは、人が言うほどいいものなのだろうか」(III,383) と呟くのである。『火の河』では、逆に、ダニエルと肉体関係を結んだ翌朝に、貪るように食事を取るジゼールの姿が、宗教的に優れていると自他ともに認めるヴィルロン夫人の視点から次のように描き出されている。

> 彼女〔ヴィルロン夫人〕は、ジゼールが食べるのを眺めた。髪の垂れた若い娘の顔は青白かった。彼女のややいかつい顎が獣のようにパンにかぶりついていたが、じっとしてぼうっとした視線が中空の一点からそらされることはなかった (I,562)。

ここでは明らかにジゼールの頭は前夜のダニエルとの肉体関係によって占められているのだが、彼女の肉体の方は、精神から自立して動いているかのように、さらに別の欲求を充足させることにかかりきりになってしまう。ジゼールを見つめるヴィルロン夫人の頭の中で、ジゼールの食欲が「獣」を感じさせるものとして、この被保護者のおかした前夜の性行為と結びついていることは間違いあるまい。

このように、モーリヤックの小説において、食欲に身を任せることは、動物的本能の支配に屈するという点で、性欲に比べ得るものとなる。よく知られているように、肉体的欲望の充足に埋没してしまうことをモーリヤックが評価することはない。この作家にとって、本

[6]『癩者への接吻』のジャンがノエミとの初夜に「うじ虫」(I,466) を想起し、『テレーズ・デスケルー』の性行為を強いるベルナールが妻の目に「豚」(II,38) となることからもわかる通り、モーリヤック世界では、性欲は疑いもなく人間の外見を動物に近づけるものとして捉えられている。

人が死の二年前に記しているように、「禁欲なくして精神生活は決してあり得なかった」[7]のであり、彼は肉体的快楽にのみ捕らわれて生きることの虚しさを表現するために、例えばその30年以上前にも、「『チャタレイ夫人の老年』という身の毛のよだつような本を思い浮かべてみる」[8]と書いている。いずれ肉体は衰えるのであり、そこに人生の全ての意味を見出すことはできない。「快楽という癌」に蝕まれた人達について、彼は次のように書く。

> 彼らによれば、熟慮、思索を中断し、自分自身を見ることや他人を見ることから彼らを逸らしてくれるものは全て良いことなのだ[9]。

肉体の快楽に身を委ねることは、思索の苦しみを逃れるために精神の麻痺を願うことに他ならず、我々が見てきたように、モーリヤックの小説において食欲もその一環に位置付けることができるのだ。

食事＝神聖な儀式

しかし、性欲に関しては、七大罪の中でも特に名を上げて「あらゆる悪の可能性は色欲の中に結実し、その名を聞いただけで聖人は顔を赤らめる」[10]と『イエスの生涯』で糾弾し、ノエミ・ダルティアーユ、マリア・クロス、テレーズ・デスケルー等の性への強い嫌悪を持った女主人公を創出してはばからないモーリヤックも、食欲に関しての態度は実はそう明確ではなく、曖昧さを含んでいることには注意しなければならない。モーリヤックの小説に描き出される食事の場には、ブルジョワ家庭の豊かさの最もよく外に対して示される場としての華やかな顔もあるのである。実際、モーリヤックの小説では、食事が単なる栄養を摂取する行為にとどまらず、「生活の簡素だが、神聖な儀式」(IV,413) という表現からうかがえるように、作中人物から神聖視されることも珍しくはない。『ガリガイ』においてアガトは将来の質素な夫婦生活について、夫となるはずのニコラに語るのだが、彼女の食事の軽視は、ニコラを失望させずにはおかない。

> 彼は香り高いスープや陶器の皿の上の果物、静かな長い食事に宗教的意味を与えていたのだ (IV,413)。

---

[7]Mauriac,*Bloc-notes V*, présentés et notés par Jean Touzot, Seuil, « Points », 1993, p.120.

[8]Mauriac, *Journal I, Les chefs-d'œuvre de Français Mauriac*, Genève, Le Cercle du Bibliophile, t.XI, p.20.

[9]*Ibid.*, p.21.

[10]François Mauriac, *La Vie de Jésus, OEuvres complètes*, Arthème Fayard, « Bibliothèque Grasset », t.VII, p.56.

こうした食事崇拝を分かち合うのは、「たっぷりと食事の出される食卓は、豊かさの外面的なしるしである」(I,64) と考えるボルドー近辺の大地主の家庭に働く使用人である。夜更けに突然帰って来て空腹だと告げるガブリエル・グラデールを前にした『黒い天使たち』の老女中ジェルサントに関しては、「彼女はグラデールを毛嫌いしていたが、主人たちの食事が彼女の宗教であることにかわりなかった」(III,251) と記される。また、『ありし日の一青年』では、アランが自分の家の召使のひとりについて、マリに次のように説明している。

> 「あなたはルイ・ラルプを知らないんだ。そう、うちの召使頭さ。〔…〕彼はフォワ・グラの缶詰を開けた。彼にとってそれは宗教的行為なんだ。」(IV,718)

大地主の使用人の家庭に育った主人公は場違いな食卓に招かれると、恐らくこうした食事崇拝のために、困惑せずにはいられない。『肉と血』の中で、クロードは、苦行に他ならなかったある食事を思い出す。

> クロードはフロワラックの友達のところで過ごした復活祭の一週間を思い出す。本当に辛かった。食卓で、今にも吹き出しそうな若い女の子たちに注視されて、それぞれのフォークをどう使うかという問題を早急に解決しなければならなかった (I,199)。

『上席権』の中でも格式張った食事の作法を守れぬ庶民階級出身のオーギュスタンがブルジョワ家庭の食卓で見苦しい振る舞いを見せる。

> 昼食の間、叔父と叔母はぞっとして物も言えずに、オーギュスタンが舌平目の後でフォークを全く皿に置かずにパンに直接かじりついたのを、ナプキンの端がチョッキの中に押し込んであったのを観察した (I,343)。

『海への道』では、食卓に執事に過ぎぬランダンの相席したことが、レヴォル一家のドゥニとローズに目をそむけさせ、ランダンに見苦しい食事態度を取ることを余儀無くさせている。

> ランダンは皿から顔を上げなくてもすむように、やむをえずがつがつと食べた。陰鬱なひげが、あらゆる料理の恩恵に浴することになった (III,587)。

また、『フロントナック家の神秘』においても、フロントナック家の事業の相棒であるドュソールの姿が彼の話し相手の姿とあわせて、次のように描かれている。

> 「そうですとも。もちろん、指で」二人はザリガニを貪り食っていた。殻が音を立て、彼らは残すまいという気持ちと上品に見せたいという気持ちに引き裂かれながらも、夢中になって汁を吸った (II,602)。

これらの全ての例に共通しているのは、「神聖視」された食事の作法を守れぬ者が、そのことで食欲の内に潜む動物性を露呈し、揶揄の対象となっていることであると言えるだろう。格式ばったブルジョワ家庭の食事に触れられる時、モーリヤックの小説では、作法を身につけたことで食欲を満たすことが正当化された感のある家庭の主人たちの観点から、彼らの食事を「神聖視」する使用人たちや、粗野な振る舞いに堕する作法を守れぬ者たちの眺めやられることがあるのだ。そして、このことを念頭において、我々が冒頭に引いた病んだ歯の例を読み返してみると、『鎖につながれた子供』の「駄目になった歯」から、『ありし日の一青年』のシモンにかけての全ての例において、腐敗は労働者、或いは使用人の口の中にあることに気付かずにはいられない。モーリヤックの語り手は、食事作法という秩序を自分に課して食欲の動物性から脱却することのできない使用人たちの口の中に、好んで病巣を暴き出しているのである。

結語

モーリヤックの小説において、食欲は両義的である。色欲の如く、人間を動物に堕落させるものでありながら、性欲が結婚においても正当化されないのとは対照的に、モーリヤックの小説世界には、食欲を洗練させ、神聖なものとまでする地方のブルジョワ家庭の食卓が備わっている。ここで思い出してみなければならないのは、モーリヤックが抱いていた「色欲」以外の大罪に関する認識である。『文学と罪』の中で聖人になろうと欲する者の小説を書くことを想像して、彼は次のように書いている。

> ただ色欲だけが、紛れようがないので、彼によって抑制され、克服されるだろう。だがその他の大罪、特に高慢の顔は、彼には決してわからないだろう、というのもそれらは教化的な外見で自己を覆いかくしてしまうこともあり得るだろうし、競って熱情、熱意を示すためについには犠牲者が自分を神だと思い込んでしまうこと もあるからだ (III,968)。

当然、「大食」へと通じる食欲もまた、その顔を見分けることは難しい。「具体性の中で仕事をする形而上家」であり、「罪深い歓楽に満ちた世界を目に見え、手で触れることができ、匂いのするものにすること」(III,966) を自己の芸術とするモーリヤックは、食欲の顔を捉えようとして、作中人物の口の中に見え隠れする病んだ歯、歯茎を読者の前に開示するのだ。しかし、あたかも『文学と罪』の一節を例解するかのように、「口の中」の描写は、主人の食事を神聖視する使用人たちの視線の中で、つまり「自分を神だと思い込んでしまう」危険に曝されながら日々食卓に連なる家族の中に、モーリヤックの語り手の席が用意

されていることまでをも露呈させているのである。